

# 教科教育学研究方法論を担当して

## —家庭科教育の視点から—

鈴木 明子（人間生活教育学講座）

### I 「教科の課題と可能性」に関する家庭科に関する講義

「教育課程における家庭科の課題と可能性」について、5月11日村上教員とともに講義を担当する予定であったが、鈴木の出張のため村上教員に鈴木担当分の講義もお願いすることとなった。村上教員の担当は、家庭科教育における学習内容に関すること、鈴木を担当は、その教授、学習に関わることである。講義の主たる内容は、①家庭科を理解する、②家庭科から教科の在り方を考える、③家庭科教育学研究の可能性から教科教育学研究の可能性を探るであった。

「①家庭科を理解する」については、現行家庭科の目標、周辺課題、家庭科教育の目的(1996)（「個人及び家族の発達と生活の営みを総合的にとらえて、日々の生活活動の中で、主体的に判断して実践できる能力を育み、明日の生活環境・文化を創ることのできる資質・能力を育成する。」）ことを目指す。ここで言う主体的に判断し実践できる能力とは、生活に対する問題意識、問題解決に向かう積極的態度、それを可能にする知識・技能の統合されたもの、家庭科の教科観の変遷、次期改訂に向けての動き、家庭科の背景学問としての「家政学」について解説し、家政学の独自性からみた家庭科で育成する資質・能力を次の3つにまとめた。総合性（科学の知を総合し解釈する力）、実践性（技能習得と日常実践につなぐ価値・態度形成）、他者との相互作用による自己の創発である。

「②家庭科から教科の在り方を考える」では、これまでのA段階や他教科の講義を踏まえて鈴木は次のような提案を行った。「不安定さ」はどの教科より意識せざるをえない家庭科であり、これまで「不安定さ」を越えて「存廃」論にまで至ることもしばしばであった。現在に至って、複合的な課題を追究し解決を図ることが重視される中で、教科学習としてそれらの課題（食育、消費者問題、家族、子育て、ジェンダー等）にアプローチすることから存在意義は増しているように思える。しかしながら、そのことは同時に家庭科という教科のフレームを不安定にしているとも言える。性別役割分業観のもと生活に役立つ技能を習得することを重視した時代、生活事象の背景や原理を科学的に理解することを重視した時代は、家庭科という教科に求められる独自性が一般的に認識されやすかった。今はそれがみえにくくなっているとも言える。一方、ひとつの教科として存在するということは、その教科の内容を教育課程で必ず学ぶことを意味する。そのことは国民の認識形成において重要な意味をもっている。村上教員からは「家庭科」という教科の意義について家庭科内容学から次のような提案があった。家庭や社会における生活実践教育の場が激減している背景の中で「家庭科」という教科として生活の知識や技術を学ぶ意義、日々の生活には多くの課題があることを認識し、それらを解決しようという姿勢を習得する意義、さまざまな生活課題に対する対応力を養う意義である。

「③家庭科教育学研究の可能性から教科教育学研究の可能性を探る」については、これまでの研究を、福田公子他（2004）『教科教育学の動向と展望—家庭科教育に関する学会誌掲載論文を中心に—』『日本教科教育学会誌』第27巻第1号より8つ抜粋し、課題を捉えた。1）家庭科教育の本質と原理の研究（家庭科教育パラダイムの模索）、2）家庭科教育の歴史研究（過去の省察から家庭科教育の未来を拓く）、3）海外の家庭科教育の研究（家庭科教育の普遍性を求めて）といった研究は重要でありながら減少している。このことは家庭科のフレームが問われていることを反映しているのではないと思われる。4）家庭科教師と家庭科教員養成の研究（生活実践にかかわる家庭科教師の力量）、5）子どもの発達、能力、学習指導法、教材の研究（価値判断、意思決定、批判的思考を導入した現実世界への接近）、6）家庭科カリキュラムの研究（子どもの生活実践力育成を目指す教科理論の追究）、7）男女共学必修運動、男女平等教育の研究（ジェンダー・フリー教育の提唱と実践）これら4つは、非常に多くなされているが、授業改善に生かされるに至っていないという課題がみられる。これらの研究成果の統合を図り、独自の検証方法の確立を図るとともに、家庭科のフレーム自体を問い直す必要もある。8）家庭科授業の研究（対話と自己内省による学びの探究）これも重要だが、非常に少ない。

さらに、家庭科内容学研究の在り方を考える最近の研究として、「教員養成における教科教育と教科内容との連携を図ったプログラムモデルの構築に向けて—家庭科・社会科・理科からのアプローチ—」（鈴木明、草原、岡田、木下、松浦拓、今川、村上、松原、高田宏、権田）を紹介した。そこでは教員養成の本質的な課題追究によって、カリキュラム改善への示唆を得ることができたとともに、教科間の連携の方策についても追究できた。

## II 教科教育学専攻における本授業の意義と今後の課題

上記のとおりB段階では、家庭科という教科、及び家庭科教育学研究及び背景科学としての家政学研究の現状を紹介し、他教科の学生とともに家庭科の理解を深めることを目的とした。家庭科の現代的意義があまりに認知されていない現状、特に中等学校の他教科の教員に理解されていない現状を憂いてのことでもあった。しかしながら、他教科の学生の関心を高めるためにも10教科を俯瞰して、共通にとらえることができるテーマを取り上げるべきであったと反省している。私自身は、他教科、異なる専門の先生方が提供して下さった情報に触れ、家庭科や家庭科教育学、及び研究方法との接点を問い直す貴重な機会になった。授業後に他専修（他教科）の先生方と情報交換する中でも、自分の教科に対する認識の深まりと「他教科との連携」に関する多様な解釈があることに気付いたことが収穫であった。

本授業が「研究方法論」という科目名でありながら、担当教員や時間等の学習環境の制限の中で、「方法論」に特化することなく、本授業の主旨の解釈に差異があることを関係者が自覚しつつ進めた本年度の展開であった。一方で、10教科共通に議論できる「研究方法」を追究する前段階として、他教科を理解し、教育学や心理学との接点を捉えることは、教育課程のなかで自教科を俯瞰してとらえることにつながったと思われる。院生といえども自教科の教科観の確立途上であり、他教科に対してほとんど理解していない現実から、教科教育学専攻における新しい試みの第一歩として成果を上げたと思われる。